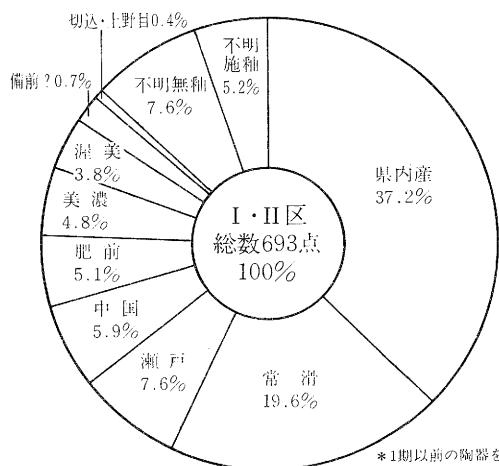


が出現し、青磁は著しく減少する。山形県米沢市の戸長里窯の類似品と考えられる擂鉢1点がある。戸長里窯製との見方が正しいとすれば、この時期の伊達氏の動向と無関係ではないと考えられる。しかし、産地についての即断はさけて

おきたい。IV期終末からV期にかけては、肥前磁器が搬入される。V期には肥前とともに、相馬・切込・上野目が搬入され、およそ幕末まで続く。仙台では藩窯となつた堤焼があるが、本遺跡からは出土していない。また、明治以後の出土品も現在ない。

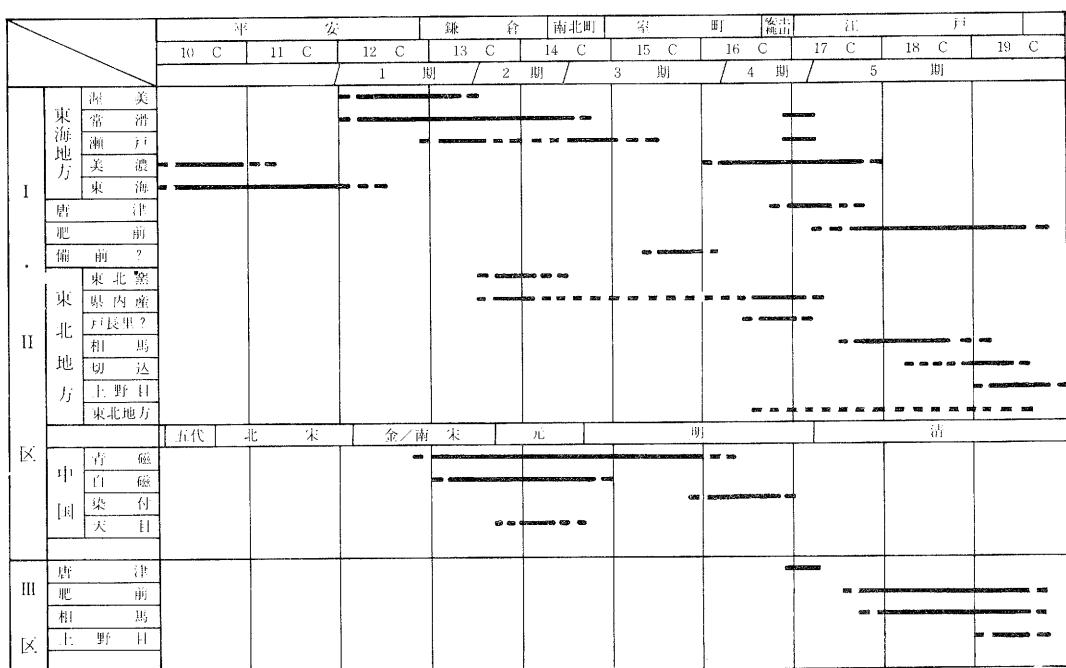
3. 県内産無釉陶器について

まず、中世の無釉陶器については、その特徴から県内産の製品が多いであろうとの予測を立て、直接生産地において標本を採集し、あるいは東北歴史資料館の



*1期以前の陶器を除く。
*「不明無釉」は戸長里?
及び東北地方産と推定されるものを含む。

第120図 陶磁器類産地別組成



(一部1979年度調査分を含む)

第121図 陶磁器変遷図

所蔵品の観察を行った。また、同資料館の藤沼邦彦氏の御好意で、直接資料を借用することができた。改めてお礼申し上げたい。観察し得たものは、東北窯、品ノ浦窯、多高田窯、熊狩窯、水沼窯であり、これらの資料のうち、特に胎土に着目し観察を行った。その結果、県内産陶器の特徴は、おおむね下記のとおりである。

1. 東北窯

1. 胎土の色調は、鉄分（？）が多いためか、他の県内産の製品に比較した場合、青黒いものが多い。
2. 胎土中に白色砂礫（長石？）が目立つ。この特徴は、現在までに確認されている他の県内窯製品にないものであり、東北窯製品の判定に最も有効であると考えられる。ただし、東北窯製品のすべてにある特徴ではない。
3. 器面調整は大半がナデであるが、刷毛目のものも少量ある。
4. あめ状に溶けた白色（半透明）の吹き出し、褐色の吹き出しが認められるものが存在するが、後者は少ない。
5. 耐火度が強いためか、灰被りで自然釉化しているものが少ない。（高温焼成の場合は、胎土の長石、鉄などが表面に吹き出で溶けている。4と共通する）
6. 明黄褐色の焼成の甘い製品は、胎土がサンドウィッチ状に、色調の差を生じるものがある。

2. 伊豆沼窯跡群（品ノ浦・熊狩）

1. 耐火度が低いため、胎土の表面に光沢をもちやすく灰被りやすい。
2. 胎土は東北窯と比較した場合、砂っぽく、石英等が溶けず残るものが目立つ。
3. 品ノ浦の製品には、割れ口が~~壁~~開面を見せるものがある。

3. 多高田窯

1. 焼成のよいものは、胎土が東北窯・伊豆沼窯跡群に比べ白っぽく、自然釉も多いものもある。
2. 胎土が白っぽいものは、おそらく鉄分が少ないためであろう。
3. 断面を観察すると、黒色粒（鉄分？）が霜降り状を呈するものがある。
4. 伊豆沼窯跡群のものと同様、砂っぽい。

また、水沼窯の製品は、県北の熊狩窯や多高田窯等よりも、県南の東北窯の胎土に類似しているとの印象を受けたが、なお不明である。なお、福島県の毘沙門窯の製品等も実見する機会を得たが、十分に理解するに至らなかった。以上、現在確認されている県内を中心とする中世の窯跡群の製品の特徴を観察してきたが、なお不十分であることは否めない。

ところで、これらの窯址群と本遺跡の出土品を比較した結果、東北窯の製品、あるいは類似品が最も多いたことが判明した。また観察・比較の結果、新に從来知られていなかった、胎土の特徴をもつ2つのグループの存在を確認することができた。

4. [胎土に白針を含むグループ]

表題のごとく、胎土中に白色針状物質を含むことが、特徴といえる。また、表面に光沢をもつものがあり、渥美の製品のごとく細砂質で、鉄分(?)・石英などを含む。この第4グループは、出土量が少なく、器形や年代についてはなお不明な点が多い。

現在までに、甕・擂鉢の器種が判明している。年代については、II期あるいはIII期の遺構に伴って出土する比較的硬質の甕、III～VI期の遺構に伴って出土する軟質の擂鉢(焼成のものも存在する)・甕(?)があり、ほぼ遺構の年代と一致するものであろう。

生産地は不明であるが、胎土中に白色針状物質を含む特徴が手掛かりとなろう。従来、筆者が指摘してきた白色針状物質(佐藤洋:1981)は、主に名取川中流域から下流域の遺跡において、縄文～平安の土器胎土にみられる特徴である。したがって、この第4グループの生産地は、名取川流域、あるいは仙台周辺のどこかに存在するのではないかと予想される。

5. 金雲母を多量に胎土に含むグループ

全体的に砂質で、白色粒子(長石?)を含み、特に金雲母を多量に含むことを特徴とする、第62図10に示すごとく、口縁部形態が極めて特徴的であり、出土数が少ないが、いずれもIV期の遺構より出土している。したがって、中世末～近世初め頃のものであろうか。生産地は全く不明である。

こうした分類を元に、生産地を各実測図中の注記表に示したが、なお東北窯の製品と思われるが判定できなかったものや、従来県内産の特徴とは異なる新たな特徴をもつもので、その特徴をグループ化できないものも存在する。また、東北大学の芹沢長介氏に、山形県米沢市に所在する戸長里窯の製品に類似すると御教示いただいた出土品もあるが、断定するに至っていない。

ところで、従来知られている多高田窯や、伊豆沼窯址群の製品と判定できるものはないようである。逆に、東北窯の製品と考えられるものや、それに類似するものが圧倒的優位を占めている。したがって、速断はできないが、仙台周辺は、おそらく東北窯等を中心とする製品の流通圏内にあったのではないかろうか。この問題は、他の遺跡の調査を待って、さらに検討されなければならない。

年代については、県内産の無釉陶器に関する藤沼氏の指摘があり、およそ鎌倉中期から後期

といわれている。本遺跡では、これらの陶器とともに、年代の判明する遺物に常滑の窯が存在する。この常滑の製品は、赤羽一郎氏の編年で、第3段階とされるものばかりである。したがって、先の藤沼氏の年代を追認する形となった。

今回は新に、従来知られていた窯の製品とは異なった2つのグループを抽出することができた。県内には、まだ未発見の窯があるものと考えられる。

また、これらの窯跡がどのような社会的背景のもとに消長したのか不明な点が多い。この点については、生産地である多高田窯は志田郡に、伊豆沼古窯は栗原郡に、そして東北窯はかつての刈田郡に属し、これらの諸郡はいずれも、鎌倉後半には北条氏の所領だった可能性のあるところである（小林・大石編：1978）。また、消費地である今泉城は名取郡に属し、この名取郡も北条氏の所領である。このような共通点は、おそらく偶然ではなく、中世窯業の成立に、北条氏あるいは、北条氏と関連する地元の領主層が関与していたことを推測させる。

生産地の問題、消費地の問題、そして流通・社会的背景など、まだまだ残された課題が多い。

4. 今泉城をめぐって

今泉城を含む仙台市六郷地区は、古代の陸奥国内においては、比較的早い時期に設置された名取郡内の地域である。⁽¹⁾

續日本紀 天平神護二(766)年十二月三十日の条に

陸奥国人正六上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣

とあり、少なくとも766年以前には名取郡が設置されていたことが理解される。しかも、最近の郡山遺跡の調査によって、この遺跡が官衙跡と推定されるに至り（坏に「名取」の刻線文字のあるものと、畿内系・関東系の坏類が出土している）、またその創建年代が7世紀後半まで遡りうるものと考えられる。しかし、今泉城跡の2度の調査においては7・8世紀の遺構や遺物は皆無に近い。

また、和名類聚抄に名取郡の地名として「井上」の名がみえ、これは現在の仙台市井土（井土浜）ではないかとの指摘もある。旧藩時代に見える今泉村の東側に隣接する二木村には、⁽²⁾

□□□□土地名有是則□□□上国ノ□□□線丸□□□正則ト名蒙リ□□□天長ニ

年空海法師ニ帰依シ灰練仏像ヲ給リ守本尊ト崇敬シ今ニ伝来所持セリ（二木家系譜）

とあり、二木家初代二木正則以来の系譜が示されている。「二木家系譜」がどれほどの信憑性があるかは定かではないが、少なくとも名取川北岸の六郷地区では平安時代以後には継続的な集落が形成されたものと考えられる。本遺跡の調査結果では、それ以前にも集落が営まれた形